

『国民報』社説にみる国家と国民について

宮 城 由美子

〔抄 録〕

義和団運動に対する8カ国連合軍の侵略と清朝政府の腐敗によって、中国は亡国の危機に陥っていた。このような状況のなかで、1901年5月10日『国民報』が日本で創刊された。『国民報』の社説は、帝国主義の侵略の意図を暴露し、専制体制の抑圧および満人の奴隷の状態から脱却することを提唱し、また欧米の革命や近代的な思想の紹介を通して中国が主権を持つ独立的な国家となり、中国の人民が自由と平等を有する国民となるための指針を示した。それが目指したものは漢民族の国家を樹立することであり、そのために愛国主義に基づく民族の独立と民権の確立を宣伝したのである。本論では『国民報』の社説で展開されている国家論・国民論そして西洋近代思想の核心について考察する。

キーワード 『国民報』社説、国家、国民、奴隷、優勝劣敗

はじめに

1900年8月、義和団鎮圧のために列強8カ国の連合軍が北京を占拠し、中国は分割の危機に陥っていた。このような状況のなかで中国人知識人たちは、救国の実現に向けて宣伝する媒介手段として新聞・雑誌を創刊した。1896-1901年にかけて日本で発行されていた刊行物に『清議報』・『開智録』・『訳書匯編』・『国民報』などがあり⁽¹⁾、これらは欧米の政治・経済・文化・思想・歴史などを紹介するとともに、愛国・救国を宣伝して列強の侵略、清朝政府の腐敗した統治を批判した。これらの刊行物の刊行は、当時日本に亡命、あるいは在留していた中国知識人や中国人留学生の間に、国家や国民の意識を高めるきっかけとなった。

本論で、これらの刊行物の中から『国民報』を取りあげたのは次のような理由による。第1は、上記の刊行物の中で最も革命を宣伝したのが『国民報』であったこと、第2は、『国民報』と同様に革命的言論を掲載していた『開智録』が、主として帝国主義を攻撃したのに対し⁽²⁾、『国民報』は反帝と反清を掲げ、なおかつ国家と国民の形成を意識して書かれていたことによる。したがってこれらをふまえ、本論では、『国民報』が出版当時の革新的な知識人が国家や国民をどのように捉えていたのか、を探る基礎的な作業を行なう。

『国民報』に関する先行研究で、最も詳細に論述しているのは郭永才の論稿「国民報」だけである。そのなかで郭は、『国民報』が列強の侵略の野心と犯罪行為を鋭く指摘し、中国人が異民族支配の清朝専制体制に甘んじていることへの強烈な批判、また梁啓超ら変法派たちの改革に対する欺瞞性、さらに編集陣の政治姿勢の弱点として反封建・反専制に対する曖昧さなどを明らかにした⁽³⁾。その他にも『国民報』について論じられたものに方漢奇『中国近代報刊史⁽⁴⁾』など数篇があるが、概論の域をでていない。

本論では『国民報』の社説を中心に、当時の中国人留学生や知識人らが国家や国民についてどのように捉えていたのかを紹介するとともに、中国人が列強と清朝専制体制下の奴隷状態から脱出して人民が主権を持つ国家を樹立し、自由・平等を有する国民となるために、欧米の思想とりわけアメリカ独立革命やフランス革命などから何を学ぼうとしたのかを考察する。

1. 『国民報』とは

『国民報』は、1901年5月10日第1期が東京で創刊されたが、資金不足のために同年8月10日第4期で停刊した⁽⁵⁾。発行の日付は、「明治三十四年」と日本の元号が使用されているが、文章は中国語で書かれ、上海へ每期2千部が送られていた⁽⁶⁾。

『国民報』の1冊の定価は「兩角」、年間の予約購読代は2円で⁽⁷⁾、購読料先払いのシステムをとった⁽⁸⁾。『国民報』は郵送で読者の手元に届けられ、郵送料は定価と別料金で、読者が各自の郵送料を計算して購読料と共に先払いをした⁽⁹⁾。

『国民報』は、総編輯の秦力山⁽¹⁰⁾が横浜の華僑馮鏡如⁽¹¹⁾の支援をえて刊行された。湖南時務学堂（長沙）の学生であった秦力山は、1898年9月14日の戊戌の政変で康有為とともに日本へ亡命した梁啓超に招かれて来日した。1900年秦力山は、かつて湖南時務学堂で梁と共に教員をしていた唐才常が漢口において蜂起した自立軍⁽¹²⁾に参加した。しかし康有為らからの軍資金や武器・弾薬の援助が滞ったために蜂起は失敗し、唐才常は処刑された。これをきっかけに、秦力山は変法派の康有為・梁啓超らと決別し、反清の革命運動に身を投じるようになった。秦力山は愛国精神の啓蒙、および反帝国主義と反清革命の宣伝手段として、『国民報』を創刊したのである⁽¹³⁾。

方漢奇によれば「『国民報』は、留日学生の中で最も早くブルジョワ革命派が主編した雑誌⁽¹⁴⁾」であるというが、当時はまだ革命派と改革派の区分が未分化の状態であった⁽¹⁵⁾。未分化とはいえ秦力山は、康・梁の下から離れ、保皇から反清へと軸足を移動させていた。『国民報』編集者の1人である馮自由が「革命を語りあった東京大同学校の学生の間から『国民報』が出版された⁽¹⁶⁾」と述べていること、孫文も「『国民報』に関心を持ち、印刷費として千円を寄付した⁽¹⁷⁾」というエピソードがあることから革命的言論を有する雑誌だったと推測できる。

雑誌によれば、発行者は京塞爾 (Kingsell)、印刷者は船津輪助とあるが⁽¹⁸⁾、京塞爾とは馮

鏡如の英名である。馮鏡如は、当時横浜で印刷業を営んでおり、興中会横浜分会長を務めていた。船津は、東京高等大同学校（後、東亜商業学校）の教員であった⁽¹⁹⁾。東京高等大同学校は、梁啓超が創設した学校で、秦力山や馮鏡如の息子である馮自由⁽²⁰⁾が学生として在籍していた。当時清朝政府は、国内外において革命を企てたり、反清朝的な言論に対する取締まりを強化していた。『国民報』も清朝政府の監視から逃れるために、様々な方策を講じた。馮鏡如と船津輪助たちも、秦力山らが清国公使館から干渉されないために、名義だけを貸していたと推測される⁽²¹⁾。

発行所は東京府下豊多摩郡千駄ヶ谷村原宿トノ部179番地（現渋谷区原宿）で、事務所は東京市麴町区飯田町6丁目24番地（現千代田区飯田橋）である⁽²²⁾。事務室内の四方の壁には、1900年の漢口自立軍起義で殉じた4人（傅慈祥・黎科・蔡丞煜・鄭葆丞）の遺影が掲げられていた⁽²³⁾。

総編輯は秦力山で、編輯には、沈雲翔・戢翼翬・楊廷棟・楊蔭杭・雷奮・王寵恵・張繼・馮自由・衛律煌・唐才質らがかわった。そのうち常駐の記者は、秦・王・衛・唐の4人であった⁽²⁴⁾。以下の表は、編集者たちの簡単な略歴である。

氏名	生年月日	出身	留学先学校名	所属組織	備考	史料及び頁数
秦力山	1877-1906	湖南	東京高等大同学校	自立軍 国民報社	湖南時務学堂学生 章太炎と共に支那亡国記念会を組織	(草3) 43 (周棉) 321
沈雲翔	1888-1907	浙江	官費留学生	自立軍 国民報社	湖北自強学堂より留学	(草3) 45 (20) 680
馮自由	1882-1958	広東	横浜大同学校 東京高等大同学校 東京専門学校	興中会 広東独立協会 国民報社	『開智録』創刊 カナダ『大漢日報』主筆	(草3) 36 (草4) 47
戢翼翬	1878-1907	湖北	官費留学生 早稲田大学	自立軍 国民報社	『訳書彙編』『大陸報』発刊。革命を鼓吹し保皇を排斥する。	(草3) 45 (実)15・39 (早)922-924
楊廷棟	1861-1950	江蘇	早稲田大学	国民報社	『訳書彙編』編輯 民権思想を促進	(草3)65・146 (早) 924-925
楊蔭杭	1878-1945	江蘇	早稲田大学 後米国留学	勵志会 国民報社	『訳書彙編』編輯	(草3)65・146 (早) 924-925
雷奮	?-1918在世	江蘇	早稲田大学	国民報社	『訳書彙編』編輯、ルソー・モンテスキューの翻訳に携わる	(草3) 65 (早) 924-925
王寵恵	1888-1958	広東	私費留学生 後米国留学	国民報社 広東独立協会 同盟会	『国民報』英文担当	(草3) 65
張繼	1882-1947	河北	早稲田専門学校	国民報社 同盟会 拒俄義勇隊	東京青年会発起人 『蘇報』参議 『民報』編輯	(草3) 66 (革初)151 (早) 925 (周棉)211

衛律煌	不詳	不詳	私費留学生	国民報社		(草3) 65
唐才質	1880-1966	広東	東京高等大同学校	自立軍 国民報社	長沙時務學堂で学ぶ 『東華新報』主筆	(草3) 66 (中) 1069

馮自由「興中会時期之革命同志」(草3と略省する。以下同様)。周家珍編『20世紀中華人物名字号辞典』(法律出版社、2000年6月)(20)。実藤恵秀『増補中国人日本留学史』(くろしお出版、1970年)(実)。早稲田大学大学史編輯所『早稲田大学百年史』(第1巻所収、昭和57年9月30日2刷)(早)。馮自由「壬寅東京青年会」(『革命逸史』初集所収)(革初)。陳玉堂編著『中国近現代名号大辞典』(浙江古籍出版社、2005年1月)(中)。周棉『中国留学生大辞典』(周棉)。「興中会会員人名事迹考」(『革命逸史』第四集所収)(革4)より作成。

記事のジャンルは、社説・時論・叢談(随想)・紀事(記事)・来文(投書)・外論(外国の評論)・訳編(翻訳物)・答問(質問応答)で、英文の論説も掲載された⁽²⁵⁾。これらの記事は、清国公使館の監視から逃れるために全て無署名であった。だが英文は『国民報』第4期「本報停止西文論説原由」の中で、王寵恵が担当していたとしている⁽²⁶⁾。

『国民報』発刊の目的は、中国の積弊を破って国民の精神を振起させることにありとし、各ジャンルのなかでは中国の大局に関する事柄を急務とし、それを取捨選択して著述したり翻訳したりした⁽²⁷⁾。

『国民報』の社説は、国家と国民を意識して書かれたものである。社説は、200年以上続いた清朝専制支配の実態と、列強侵略の原因を明確にして亡国の危機を訴えた。

第1期「原国」では、国家論を取り上げた。第2期「説国民」では、奴隷状態に陥っている中国の人民に独立した国民となりうる指針を示した。第3期「説漢種」では、中国の国家は漢民族のものであり、国民とは漢民族である、という民族主義を語る。第4期「亡国篇」では、すでに亡びようとしている中国を新しく建て直すためには、古い中国を亡ぼさねばならないと訴えて、そのための人材として英雄が必要であると論じた⁽²⁸⁾。

『国民報』社説という国家とは、多くの人民の力の結集によって建設され、人民が主権を持つことである⁽²⁹⁾。国民とは、その国の統治権の下、その国を構成する人民であり、国民は、国法を守り納税する義務を果たし、権利・責任・自由・平等を併せ持つ独立した民のことである⁽³⁰⁾。しかし社説は、中国には国というものはないと述べ、その理由として①中国は2千年にわたって王朝が変遷を重ねてきたが、これは一家の私事の変遷にすぎなかったこと⁽³¹⁾、②列強の侵略によって中国の主権は列強に握られ⁽³²⁾、中国の人民は、列強と清朝に隷従する奴隷的状态であったこと⁽³³⁾を指摘した。

『国民報』は、列強の侵略をはねのけ清朝専制体制を覆すために、社説において彼らの暴虐を激しく批判した。しかし帝国主義や専制支配の脅威を語るだけでなく、アメリカ独立革命やフランス革命など、欧米の革命や独立運動も紹介するとともに中国も革命を起こし独立した漢民族の国家を建設するために、現状の打破を中国の人民に訴えたのである。

また保皇を唱える康・梁を厳しく批判した。馮自由「東京国民報」によれば、「漢口自立軍の失敗によって康・梁と決別した秦力山が最も激しく彼らを批判し、康・梁の様々な罪状をこ

とこまかくあげつらった⁽³⁴⁾」とある。中国における近代国家のあり方について梁啓超は次のように考えていた。国家とは、領土的・民族的に独立していること、主権の確立と国民国家の建設がなければ、列強の侵略に対抗できない⁽³⁵⁾。しかし当時の中国は清朝専制体制下において人民は暗愚で、まだ民智は開かれておらず、現実の問題として光緒帝を中心とする立憲君主国家論を打ち立てなければ、中国の独立を守ることはできない、とした⁽³⁶⁾。これに対して『国民報』社説は、清朝専制体制の下で奴隷状態・無権利状態におかれている中国の現状において、光緒帝を庇う康・梁に大いなる懐疑を抱いていた。そして国が亡びる根源を考えないで「私が国を守る⁽³⁷⁾」と叫んでいる康・梁を批判した。

2. 『国民報』社説にみる国家と国民

欧米列強が中国を侵略しようとした。それは新たな市場の確保にあった。アヘン戦争以後、欧米列強は圧倒的な軍事力をもって中国へ侵略し、治外法権の承認や領土の割譲など、数々の不平等条約を締結させた。1901年には義和団を鎮圧し北京議定書が締結され、その結果4億5千万両という法外な賠償金の支払いが課せられ、北京・天津・山海関などへの軍隊駐屯、砲台の撤去、関税・塩税の外国人管理などが強行され、中国を半植民地化した。『国民報』第1期の社説「原国」は、その冒頭で列強が中国に侵略した様子を次のように記した。

アジアの東に大地があり、白人が共有している。その地の重大な権利は全て白人が握っている。それゆえに白人は、至るところで思うがままに横暴な振る舞いをしている。その土地の人々は奴隷となり、牛馬のように働かされてすでに久しい⁽³⁸⁾。

「原国」は、列強の侵略によって中国にはすでに国がない状態であり、中国人は列強の奴隷となってしまったことを読者に強くアピールした。

それでは中国は、昔から国が存在していたのであろうか。「原国」では、秦漢以来連綿と続いてきた王朝支配について次のように分析した。

秦漢唐宋元明は一家のことをいうのである。それは殺戮しあって争奪したもので、皆一家の私事であった。所謂王朝が代わったというだけのことであって国ではない。君主や臣下は、土地と人民を治める政府であっても国ではない⁽³⁹⁾。

すなわち清朝も「一家の私的な呼び方」であり、「一種族の私的な名称⁽⁴⁰⁾」であり、国ではないとした。

国家と王朝・国民の関係については、梁啓超がすでに論じている。梁は中国の人民が強権を発動する者を崇拜し、擁護し、その奴隷や手先となった⁽⁴¹⁾とし、また一姓の私有財産（王朝）を支えているのは、人民であると指摘している。梁もまた中国の人民は国民ではなく、奴隷となっていることを明らかにした。では、なぜ中国人は権力者に対して従順で、奴隷的身分に甘んじていられるのだろうか。『国民報』叢談、「順民」によれば、かつて満州族が山海関から軍

隊を率いて中国に侵入してきたことや、日本が侵略した時の様子について次のように語っている。

昔、清軍が入関し威力がいたるところに響くと、民は大清順民と書いた旗を持って迎えた。今、日本兵が天津に到れば、民はまた大日本順民と書いた旗を持って迎えた。要するに中国の民は、もともと順民になれていた。君主が最も喜ぶのは順民であり、従わなければ死が待っており、軍隊によって脅した。中国の民が最も懼れるのは、死であり、軍隊であった。ゆえにそれに従うことを受け入れた⁽⁴²⁾。

これは中国人は死を選ぶくらいなら、国民を放棄して権力者に従順な奴隷になることを選択したといえる。ここでいう奴隷とは、奴隷制度下の奴隷身分や奴婢・奴僕ではなく、専制体制の下、権利の剥奪や主体性を喪失した存在に対する、当時の人々の自己認識を意味していた⁽⁴³⁾といえる。

社説「説国民」は、国民と奴隷の違いを古来より中国人の世界観にある「天」の思想で語った。

国民とは天が吾を民とし、奴隷は天が民に遣わせた者である。国民は権利・責任・自由・平等・独立がある。だが奴隷には、そのような権利はなく、あるのは圧政と卑しめであった⁽⁴⁴⁾。

国民と奴隷の区別は、天が決めたことであり、背くことはできない。清朝にとって、中国人を国民であると覚醒させることは、満州族の支配の転覆につながることになる。中国人を奴隷の身分に陥れるために清朝がとった手段は、個人の尊厳を否定することである。そのために満州族の風俗である弁髪⁽⁴⁵⁾の強要や文字の獄など思想の統制を実行した。『国民報』社説の「説国民」は思想の統制とは「中国国民の種子を絶つことであり、中国人の心に死を求めることである⁽⁴⁵⁾」といった。それだけではない。「満州族を守るために漢民族の軍隊を編成させ、重税を課する⁽⁴⁶⁾」など、清朝はほしいままに漢民族を虐げたのである。モンテスキューは、中国の皇帝支配について次のように語っている。

中国の支配者は、その統治を維持するには従順が最も適切な手段であり、それを鼓吹するために、父祖に対する尊敬心を植え付ける必要があり、数々の典礼・儀式を定めた。父祖に対する尊崇は必然的に尊敬を表明するものであり、それは老人・主人・官人・皇帝と関わることである。これらが全て典礼を構成し、典礼が国民の一般精神を形成した⁽⁴⁷⁾。

モンテスキューは、中国の人民が皇帝に服従するのは徳義心からではなく、恐怖と幼いころから儀礼を教え込まれるなかで培われた恭順の精神による、と分析したのである。すなわち礼は、支配者の政治生命にかかわるものとして特別に重視されていた。

かつて康熙帝は、専制支配を推し進めるために、「礼の實在するところはただ一つの讓にある⁽⁴⁸⁾」と述べた。中国の人民に各自の身分・地位・役職に従って謙讓恭順を示し、自我を抑制することを要求した。皇帝への反逆を未然に防ぐとともに、礼儀正しい恭順心を鍛える必要

性から、とくに人間の道徳関係として儒敎を重視した⁽⁴⁹⁾。中国人は、彼ら自身が「大清順民」「大日本順民」などの旗を掲げたように、権力支配者に恭順する行為を示し、自ら奴隷を選択した。社説「亡国篇」は、奴隷になることを選択した代表が清朝に諂う漢奸や官僚である、と指摘した⁽⁵⁰⁾。清朝の平定に尽力した洪承疇⁽⁵¹⁾と、太平天国を鎮圧した曾國藩⁽⁵²⁾を漢奸だと名指し、清朝を保持するために「何億万人⁽⁵³⁾」もの漢民族を殺したと非難した。洪・曾らによる漢民族の大量殺害は、「一姓の寵愛を受けて自榮することを求める⁽⁵⁴⁾」ことにほかならず、彼らの行為は国家を裏切り、国民となることを放棄した、といわざるをえないであろう。さらに社説「説漢種」では、漢人官僚を次のように描いた。

漢民族の痴れ者は、ただ儲けと扶持を得ることだけを利得とし、大義を顧みようとしなかった。精神は満人の精神であり、仕事は満人の仕事をしただけである⁽⁵⁵⁾。

また「説漢種」では、漢人官僚の腐敗ぶりに対する怒りだけでなく、私利私欲のために異民族へ忠誠を誓ったことへの憤りも看取れる。

列強は中国を武力で叩きのめしただけでなく、中国の司法権・財政権など各種の利権を一手に握り、中国の主権を奪って清朝を支配下においた。けれども清朝は、自らの命と地位を守るために列強に媚び諂い、その結果として満州族に隷属する漢民族は、強権を用いた列強と清朝の双方から抑圧されることになった。社説「説国民」は、いみじくも次のように述べている。「天地において逃げるところがなく、吾が中国は国民となることを求める者が一人もいなくなった⁽⁵⁶⁾」と。まさに中国人は八方塞がりの状態におかれていたのである。このように二重の奴隷状態になることは、漢民族が存亡の危機に陥り、国民国家を建設することができなくなる⁽⁵⁷⁾ことを意味していた。

3. 社説にみる欧米とその思想

ロシアを除く欧米の主な国々は、すでに国民主権と基本的人権を有する国民国家を形成していた⁽⁵⁸⁾。一方、それを背景に対外的には帝国主義的国家としてアジア・アフリカ・ラテンアメリカの弱小国を積極的に侵略した。列強の間では、国家は「実力」によって左右され、国家の生存において「実力」の拡張が必須であるとする「優勝劣敗」の思想が次第に広まっていった⁽⁵⁹⁾。社説「説国民」では、優勝劣敗について次のように述べている。

生物が無形の競争を続けて進化し続けるのが凄まじいように、万物の競争は激烈である。世界の国民を有する国は、群れだつてアジア大陸の極東の地に手をつけた。国民は奴隷の兵を殺したが、奴隷を損なわずに平らげた。国民は奴隷の権利を握って、奴隷を窮めることなく平らげた。これが優勝劣敗の理論である⁽⁶⁰⁾。

この国家・民族・人種間にみられる優勝劣敗の理論は、スペンサーの社会進化論に基づいたものである。西洋＝英知・文明、その他の世界＝無知・野蛮という図式を用いて、それを「優

勝劣敗・適者生存」論にあてはめ、社会や国家間の競争に適用した⁽⁶¹⁾。欧米諸国人は、白人社会を文明社会とし、世界のトップとして君臨できる人種と位置づけ、有色人種を未開人として軽視し、弱小国・弱小民族を侵略する根拠として利用した⁽⁶²⁾のである。

しかし中国は広大な土地を持ち、人口も4億をこえる。小国、小民族とはいえない。一体列強の優勝、中国の劣敗の原因はどこにあるというのだろうか。社説「説漢種」は、その原因を以下のように説明している。

東西の智力・財力・武力は大きく隔たる。すなわち国と国でないものが争い、国民と国民でない者が争えば、脆い卵が石にあたって割れるように、また狐火が明月に勝てないように、太刀打ちすることはできないまま敗れさることは仕方のないことである⁽⁶³⁾。

すなわち中国の劣敗の原因は、国家と国民がないことに起因していると論じたのである。一方、欧米が列強としての地位を築くことができた理由を、社説「説国民」は、モンテスキューらの思想が国民へ波及したことにある、と述べている⁽⁶⁴⁾。「説国民」は、フランス革命以前のフランスの民は「全国に1人も国民が存在しておらず、今日の中国と何ら変わりはない⁽⁶⁵⁾」と述べ、フランス革命の勝利はモンテスキューらが播いた「国民の種子」が実を結んだ結果である、と論じた⁽⁶⁶⁾。民主・民権の「播種」による国民の形成こそが、欧米に列強としての地位を構築させる要因となったことを明らかにした。

中国といえば、専制支配がすでに200年間も続き、しかもわずか1千万人の満州族が4億人の漢民族を支配下におき⁽⁶⁷⁾、弁髪の強要や思想統制、税制改革・綱紀肅正などの強権をもって漢民族を支配してきた。この専制支配の状態は、清朝の優勝、漢民族の劣敗と捉えることができる。それゆえに列強が、腐敗し弱体化しつつあった清朝を優勝劣敗をもって侵略・占領の根拠としたのは当然の結果であった。

このような現状分析の一方で、『国民報』の編集者は、欧米の革命思想を積極的に紹介した。その目的は、それが漢民族の国民国家の形成の礎と成りえるものだと考えたからである。社説は、欧米の思想の中でも国家の主権と国民の権利についてとくに注目し、各期の社説においてアメリカ独立革命とフランス革命を取り上げている。アメリカ独立革命とは、イギリスの植民地支配からの独立のことであり、フランス革命とは、ブルボン専制王朝を覆した市民革命のことである。これらの革命には、人民のリーダーたる英雄の出現が伴っていた。社説「亡国篇」では、英雄について次のように語る。

フランスにはナポレオンがいた。アメリカにはワシントンがいた。共に大豪傑と呼ばれている。しかしフランス革命やアメリカ独立は、彼ら1人の力で成し遂げたのであろうか。彼らを支えた多くの人民がいたからこそ成功したのである⁽⁶⁸⁾。

この英雄を支えた人民は、モンテスキューらが播いた種子が結実した成果であり、人民が一致団結して英雄を支え、革命を成功へ導いたのである。2つの革命の成功によって、議会政治が発展し、国民は自由・平等の権利と主権を獲得し、基本的人権を尊重し合う近代国家を樹立し

たのである。

しかし中国とはいえば、外からは列強の侵略によって外国人が主権を持ち、内からは清朝専制体制による圧制を受けていた。すなわち革命前のアメリカとフランスの立場を、中国は一国だけで背負っていた。中国は、米仏両国のように革命を起こそうにも英雄はまだ現われておらず、人民の団結力も不足していた。その理由は「国民の種子」が播かれていないことによる。アメリカ独立革命の理論的根拠となったのは、J・ロックの政治理論である、それは自然状態の平和を保つために人々は合意によって国家を形成し、立法権を最高とする権力を統治者に信託して市民的統治政治形態は成立する。しかし統治者の権力乱用には、国家社会の主権者たる国民が、抵抗権・革命権でもって新しい組織を建設することができる⁽⁶⁹⁾、というのである。ロックの思想に影響された。モンテスキューは自由と三権の分立の説を唱え⁽⁷⁰⁾、ルソーは社会契約に基づく自然状態の下での人間の自由と平等を唱えた⁽⁷¹⁾。アメリカ独立宣言やルソーの思想は、またフランスの人権宣言にも影響を与えた。

一方、中国では儒教を国教として皇帝専制政治を頂点に、文人官僚が支配する中央集権的国家を形成していた。儒教は聖人・賢者の経典や伝記によって民智を開き、民気を長じ、民力を厚くすることができるものがたくさんあった。しかし清朝専制政体は、それらを用いずに経典の中から自分に都合のよい箇所ばかり取り上げて、民に対する支配を正当化し、民を奴隷にしたのである⁽⁷²⁾。

社説「説国民」において、清朝は中国の人民に対して新聞などの出版を禁止し、演説会を禁止し、民智を開くことは人を惑わす呪いだ⁽⁷³⁾として、文字の獄など徹底した思想統制を行った、と非難した。中国の思想界は、古典の文章を正し文字の意義や文物制度を明らかにする考証学が盛んで、それは列強と清朝専制王朝を覆すほどの影響力を持つものでなかった。

『国民報』の社説が欧米の革命思想を紹介したのは、それによって中国人に対する侵略と専制的抑圧から脱却する道を示し、国民主権と基本的人権を持つ国民国家を建設することにあつたのである。

おわりに

『国民報』社説の歴史的意義は、反帝反清の姿勢を貫いて民族主義と国民、国家意識への覚醒を強調することによって、清朝専制体制を覆し中国人を奴隷状態から解き放ち、新しい国家の建設を樹立することをめざしたことである。

『国民報』社説は、国家と国民の覚醒を促すことにつとめた。中国の滅亡をもたらす根源は、2つある。1つは、外圧である。中国は歴史上、たびたび異民族の侵略に脅かされていたが、現在の中国はそれ以上の危機状態に陥っていた。列強は自国の利益を拡張するため、「優勝劣敗・適者生存」を武器として侵略した。列強の侵略によって中国は分割され、主権や自由権・

司法権・財政権など各種の利権が奪われて、亡国の危機に陥った。2つ目は、清朝の腐敗と国内の政情不安である。『国民報』社説は、清朝に対する反逆を防ぐために、皇帝への恭順と思想統制の強要を徹底し、漢民族を奴隷の地位に陥れたことを明確にした。社説は、漢民族が奴隷的状态に甘んじていることに一貫して批判的な立場をとり、清朝専制体制の暴政と列強の侵略によって、漢民族は二重の奴隷として抑圧されていることを示した。社説は、民族存亡の危機に完全に陥ったことを明らかにし、なぜこのような立場になったのかを、中国の人民一人一人の問題として提起したのである。

社説は、フランス革命やアメリカ独立革命のことをしばしば取り上げた。それは中国知識人たちが、欧米の革命や独立に憧憬した様子が如実に表されていた。2千年も専制王朝体制に屈し、奴隷的風習と奴隷的根性を身につけた中国人が、現状からの脱出を図ろうとするための目標でもあった。

『国民報』社説のいう国民とは、国の主権やさまざまな権利をその国の人民が所有し、独立している人々のことである。しかも国民は、国家に対して責任と義務を伴った。決して一個人や、一家の所有ではないのである。だが現状の中国は、それらの権利をすべて放棄していると指摘した。その状態から脱出し、新しい中国を建設するには、先ず人民が国家の存在を知り、中国の国民となりうるべき自覚を持つことであると唱えたのである。

〔注〕

- (1) 祝均宙「概論辛亥革命前后在日出版的中文期刊」(『図書館界』57巻6号、2006年3月12日) 59-61頁。

1896-1901年にかけて日本で発行された中国の定期刊行物

刊行物名	創刊—停刊日	出版地	主要編輯者	摘 要
清議報	1898.12.23-1901.11.11	横浜	梁啓超	資産階級改良派主宰の雑誌。「主持清議・開発民智」を標榜した。
開智録	1900.11.1-1901.4	横浜	鄭貫一・馮懋龍	帝国主義を攻撃した。革命の宣伝・煽動した刊行物
訳書匯編	1900.12.6-1903.4政治 学報に改める	東京	戡翼輩・楊廷棟・雷奮・ 金邦平	日本初留日学生が出版した雑誌。「勵志会」主要刊行物。ルソー『民約論』など欧米文化思想を紹介した。
国民報	1901.5.10-01.8 10	東京	秦力山・戡翼輩・沈雲翔	反帝反清を掲げた革命的宣伝雑誌

参考史料：祝均宙「概論辛亥革命前后在日出版的中文期刊」(『図書館界』57巻6号、2006年3月12日) 59-61頁。丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第1集(人民出版社、1982年7月)。方漢奇『中国近代報刊史』(山西教育出版社、1981年6月)。

- (2) 金沖及「開智録」(丁守和主編『辛亥革命期刊介紹』第1集、人民出版社、1982年7月所収) 86-89頁。
- (3) 郭永才「国民報」(丁守和主編、前掲) 93-113頁。
- (4) 方漢奇『中国近代報刊史』(山西人民出版社、1981年6月) 204-206頁。なお日本の研究は皆無

である。

- (5) 馮自由「東京国民報」(『革命逸史』初集、台湾商務印書館、中華民國54年10月第2版所収) 143頁。「間もなく資金不足となり、停刊となる」とある。
- (6) 馮自由「国民報及大陸報」(『革命逸史』第2集、台湾商務印書館、中華民國32年2月初版、54年10月第2刷所収) 78頁。
- (7) 『国民報』第1期(国民報社、明治34年5月10日) 奥付。
- (8) 「本報簡要章程」(『国民報』第1期所収)。
- (9) 同前。
- (10) 秦力山(1877-1906)、湖南省長沙縣出身。原名、鼎彝。湖南時務學堂及び東京大同学校の学生。1900年に唐才常と共に漢口に赴き、自立軍起義に参加したが、康有為が約束した援助資金が届かず、失敗に終わった。これを契機に秦力山は康・梁と決別し、反清革命に投じた。1901年『国民報』を創刊し、留日学生に反清思想を宣伝した。1902年に章太炎と「支那亡国記念会」を組織した。馮自由「興中会時期之革命同志」(『革命逸史』第3集、台湾商務印書館、中華民國54年10月所収) 43頁。周棉『中国留学生大辞典』(南京大学出版社、1999年8月) 321頁。
- (11) 馮鏡如(?—1913)、広東省南海県出身。横浜で印刷業を営む。興中会横浜分会会長。1898年梁啓超に孫文と連携を取るようたびたび促したが、果たすことはできなかった。1903年張園国民議政会を発起したが、官憲に通報され、広東に閑居。1913年病没。馮自由は彼の息子である。馮自由「東京国民報」(前掲) 143頁。「興中会組織史、五・横浜興中会」(『革命逸史』第4集、台湾商務印書館、中華民國54年10月所収) 14-17頁。章開沅主編『辛亥革命辞典』(武漢出版社、1991年8月) 107-108頁。
- (12) 1899年唐才常・林圭らが上海で自立軍を組織した。日本に亡命していた康有為らの援助を受け、留日学生では秦力山・沈翔雲・戢翼翬・呉禄貞らが参加した。一方では哥老会と提携し、1900年7月、漢口・漢陽さらには安徽・江西・湖南において同時蜂起を予定したが、康・梁からの援助資金が届かなかったことや武器・弾薬不足などから、未遂のうちに弾圧された。唐才常は漢口において逮捕され処刑された。湯志鈞『戊戌変法人物伝稿』増訂本上冊(中華書局、1982年6月) 469-470頁。
- (13) 馮自由「東京国民報」(前掲) 143頁。「東京国民報補述」(『革命逸史』初集所収) 144-145頁。
- (14) 方漢奇(前掲書) 204-205頁。
- (15) 金城正篤「清末における「奴隸」・「奴隸根性」論—変革主体の形成との関連で—」(『琉球大学文学部紀要(史学地理篇)』第30号、1987年3月) 170頁。
- (16) 馮自由「記東京大同学校及余更名自由経過」(『革命逸史』第4集所収) 101頁。
- (17) 馮自由「国民報及大陸報」(『革命逸史』第2集所収) 78頁。方漢奇(前掲書) 204頁。
- (18) 『国民報』第1期、目録及奥付。船津輪助(1878-1940)、東京府南足立郡出身。東京専門学校文学科(早稲田大学)卒業後、東京高等大同学校教員となる。1902年9月-1903年6月、北京東文学社教員。帰国後、埼玉県で木材業に従事した。船津喜助編『燕京佳信—船津輪助の北京通信—』昭和53年8月15日) 1-3頁。
- (19) 小川博「船津輪助のこと」(船津喜助編、同前所収) 239-240頁。

- (20) 馮自由 (1882-1958)、広東省出身。原名懋龍。父は馮鏡如である。14歳の時に、興中会に入会した。1899年横浜大同学校へ入学し、翌年、19歳の時に「自由」と改名した。東京専門学校 (早稲田大学の前身) を卒業した後、鄭貫一らと『開智録』を創刊し、自由と平等を提唱した。20歳には王寵恵・李自重らと広東独立協会を組織した。1905年同盟会に加入。1910年カナダに赴き『大漢日報』の主筆となった。1912年南京臨時政府稽勳局局长に任ぜられ、革命史料を収集した。1924年章炳麟と共に「反赤救国大連合」をつくり、中国の「赤化」に反対した。1951年香港を去り台湾に渡り病没した。馮自由「興中会時期之革命同志」(前掲) 36頁。「興中会会員人名事迹考」(『革命逸史』第4集所収) 47頁。方漢奇(前掲書) 510-511頁。
- (21) 馮自由「東京国民報」(前掲) 143頁。小川博(前掲書) 250頁。清国公使館から干渉されることを恐れ、秦力山が馮自由に相談し、馮自由は、秦力山と沈雲翔を父の馮鏡如に横浜で会うようにした、とある。
- (22) 『国民報』第1期、目録及奥付。「東京国民報補述」(前掲) 144頁。「事務所設在日本東京小石川区白山御殿町百十番地」「編輯所設在麴町区飯田町六丁目二十四番地」と書かれている。
- (23) 馮自由「東京国民報補述」(同前) 144頁。傅慈祥 (1872-1900) は、湖北武備学童から日本の成城学校へ官費留学し、卒業後陸軍士官学校の第1期生として入学。励志会会員。黎科は帝国大学学生、蔡丞煜は日華学堂学生、鄭葆丞は不詳。
- (24) 馮自由「東京国民報」(前掲) 143頁。「東京国民報補述」(同前) 144頁。
- (25) 馮自由「東京国民報補述」(同前) 144頁。孔健『中国新聞史の源流』(批評社、1994年9月25日) 61頁。
- (26) 「本報停止西文論説原由」(『国民報』第4期、明治34年8月1日)。これには「本社英文主筆として北洋大学堂卒業生の王寵恵君を招いていたが、現在王君はアメリカに留学、すでに前月出発していた。現在このポストは、まだ人を得ていない。しばらく停止することを布告する」とある。この他に馮自由「東京国民報補述」(同前) 144頁の中で「王寵恵の手にかかったものである」と記されている。
- (27) 「倡辦国民報簡明章程」(『国民報』第1期所収)。
- (28) 『国民報』の引用はすべて羅家倫主編中華民国史料叢編『国民報彙編』(中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会、中華民国57年9月1日)を史料として使用している。以下、『彙編』と記す。社説については「原国」・「説国民」・「説漢種」・「亡国篇」とのみ記す。
- (29) 「原国」6頁。
- (30) 「説国民」8-15頁。
- (31) 「原国」4-5頁。
- (32) 「原国」4-5頁。
- (33) 「亡国篇」26頁。
- (34) 馮自由「東京国民報」(前掲) 143頁。
- (35) 木原勝治「清末における梁啓超の近代国家論」(『三田村博士古希記念東洋史論叢』立命館大学人文学会、1980年8月所収) 362頁。
- (36) 木原勝治(同前) 375-376頁。

- (37) 「亡国編」24頁。
- (38) 「原国」4頁。
- (39) 「原国」5頁。
- (40) 「亡国編」25頁。
- (41) 梁啓超「積弱遡源論」第1章(『清議報』第77冊、光緒27年3月11日、成文出版社、第10巻、中華民國56年5月20日所収)4952頁。
- (42) 「順民」(『彙編』所収)80頁。
- (43) 金城正篤「清末における「奴隸」「奴隸根性」論—変革主体の形成との関連で—」(前掲)150-151頁。
- (44) 「説国民」、8頁。
- (45) 「説国民」15頁。
- (46) 「説漢種」22頁。
- (47) モンテスキュー著・根岸国孝訳『法の精神』(河出書房、昭和42年9月19日)265頁。
- (48) 「明禮讓以厚風俗」『康熙皇帝遺訓』(東京大阪屋號書店、昭和18年)52頁。蕭橘『近代中国の東西文化論』(中国書店、2004年12月24日)13頁。
- (49) 蕭橘(前掲書)12-13頁。
- (50) 「亡国篇」25頁。
- (51) 洪承疇(1593~1665)、福建鍾南安出身。1616年進士。流賊の討伐で功を立て、総督となる。清軍と松山で戦って降伏し、呉三桂らとともに清朝の中国の平定に尽力し大学士となる。『清史稿』下册列伝24(香港文学研究社出版)1018-1019頁。王鍾翰点校『清史列伝』巻78(第20冊、中華書局出版、1987年11月)6443-6453頁。
- (52) 曾國藩(1811~1873)、湖南省湘鄉県出身。1838年進士。太平天国鎮圧のために湘軍を編成して功績をあげ、曾は兩江総督に任ぜられた。洋務運動の指導者でもあり、李鴻章・左宗棠などの人材を育成した。1870年直隸総督のときに、天津教案の処理で非難され辞任した。桐城派の学者でもある。著書に『曾文正全集』『曾文正公手書日記』がある。『清史稿』列伝192(下册、同前)1320-1321頁。王鍾翰『清史列伝』巻45(第12冊、同前)3540-3559頁。
- (53) 「亡国篇」25頁。
- (54) 梁啓超(前掲書)5317頁。
- (55) 「説漢種」22頁。
- (56) 「説国民」17頁。
- (57) 「原国」7頁。
- (58) 馮自由「民生主義與中国政治革命之前途」(『革命逸史』第4集所収)118頁。
- (59) 船津輪助「日本保全論」(『早稲田学報』第53号、明治34年所収)33頁。
- (60) 「説国民」16-17頁。
- (61) 渡辺正雄「明治初期のダーヴィニズム」(〈講座比較文学〉第5巻『西洋の衝撃と日本』東京大学出版、1973年10月10日所収)90頁。
- (62) 呉玉章『辛亥革命』(北京人民出版社、1961年9月初版、1973年8月北京第6次印刷)50頁。

- (63) 「説漢種」21頁。
- (64) 「説国民」16頁。
- (65) 「説国民」16頁。
- (66) 「説国民」16頁。
- (67) 「説漢種」23頁。
- (68) 「亡国篇」28頁。
- (69) 大月晴彦責任編集『ロック・ヒューム』27 (中央公論社、昭和43年6月) 22頁。
- (70) モンテスキュー著・根岸国孝訳 (前掲書)。
- (71) ルソー・桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』(岩波文庫、2003年9月12日、第72刷) 15頁・228頁。
- (72) 李曉東『近代中国の立憲構想』(法政大学出版社、2005年5月30日) 123頁。
- (73) 「説国民」15頁。

(みやぎ ゆみこ 佛教大学大学院博士後期課程)

(指導：清水 稔 教授)

2008年9月30日受理